

目次

● 巻頭言	1
● 「私が石原莞爾を研究するようになった経緯について」	
● 飯田教大	
◆ 会長問題、悲シキ極ミナリ	2
◆ SNS	4
◆ 総会報告	6
◆ 会員便り	
◆ 書籍紹介	
● コラム	8

宣言 (昭和31年協和会「昭和革新論」より)

- 1、人類歴史は最終戦争時代に突入し、世界の統一は眼前に迫った。われらは最小の犠牲をもって、新しい歴史を開こう。
- 2、都市解体、農工一体、簡素生活、この三原則によって新日本を建設し、搾取と戦争のない、人類次代文化の先駆となろう。
- 3、東亜に対する過去の態度を深く懺悔し、まず近隣と道義によって固く結び、ひいて永久平和の実現に邁進しよう。

「私が石原莞爾を研究するようになった経緯について」



当会運営委員 飯田 教大

私が始めて石原莞爾に興味を持ったきっかけは、高校の日本史の授業でした。山川出版社「日本史」に石原莞爾の解説として、「石原は、近い将来、東西両文明それぞれの盟主となった日米両国家間で「世界最終戦争」が戦われ、それは飛行機による殲滅戦争となるだろうと予言(322ページ)と記述してあります。まず私は、この予言が的中していることに驚きました。

それから、大学生になった私は、大学の図書館で、「世界最終戦争」を見つけ読みました。そこには、戦闘形態が点↓線↓立体つまり、1次元↓2次元↓3次元になると述べ、この3次元世界を代表する航空機での戦闘による世界戦争を経て、世界は絶対平和になることを理論的に解説してあり、秀才が書いた文章だと感じました。

ただ、このころは卒業論文が「宮澤賢治の精神世界について」だったので、国柱会のことは少し調べましたが、あまり深入りしませんでした。石原が賢治の死後に、法華経の写しを受け取ったことを知ったのは、もっと後のことになります。

再び、私が「世界最終戦争」を読み始めたのは1年前のことです。その経緯を説明すると少し長くなりますが、以下に書き出します。

それは、かつてNHKスペシャルにて、沖縄戦を取り上げていたのが、最初のきっかけです。その時に出演していた元歩兵第32連隊の大隊長だった伊藤孝一氏を知りました。その豊饒(かくしゃく)とした姿に惚れ惚れした私は、後日

この方からのインタビュをまとめた本の笹幸恵著「沖縄戦 二十四歳の大隊長 陸軍大尉伊藤孝一の戦い」を読みました。286ページには次の記述がありました。

「東京が焼け野原になって残念です」と石原は眼を輝かせながら答えた。「禍を転じて福となし、道路が広く、樹木の多い素晴らしい都市を造らなければ、その好機だよ。」また、石原の他、対支戦、対米戦に反対した陸軍軍人に東久邇宮稔彦王、多田駿が挙げられていました。私はかつて読んだ、中川正光著「神道の呼吸法」にも、この二人のことを見識のある人物として紹介してありました。私の頭の中で、東久邇宮、多田、石原が一本の線でつながった瞬間でした。どうしても、本人たちのことを扱った本を読みたいという気持ちが強まり、「多田駿伝」を読むことにしましたが、そこには、石原が多田を参謀次長に推して、日中戦争の拡大を阻止しようとし、一方の多田は石原のことを「日本の先覚者」と呼び、互いに良き理解者であったことを知りました。ここまで来て、私は石原莞爾のことをもっと知りたいと思い、再び「世界最終戦争」を読み、仲條立一・菅原一彪編「石原莞爾のすべて」も読みました。私は、この本に収められている写真に、合掌姿の石原を見つけ、これが石原の本当の姿だと確信しました。

石原は秀才肌だけではなく、法華経信仰を基にした、絶対平和の理想を抱き続けました。そして、田中智学や里見岸雄から学んだ国体思想を体得し、広める使命を自らに課しました。

私もできることなら、彼のような信仰心を忘れず、明確な国体思想を持った人物でありたいです。

プロフィール

昭和63年1月8日奈良県に生まれる。幼い頃から歴史に興味を持ち、大学時代は宮澤賢治を研究する。卒業後、防衛省海上自衛隊へ入隊、26歳で、皇国護持史観の泰斗、平泉澄博士の門下生にあたる田中卓先生に出会い、尊王思想に目覚める。一時期は皇室日記を毎週録画するほどだった。以後、女系・女性天皇について研究を続け現在に至る。

「石原莞爾生誕百三十年没後七十年」

石原莞爾平和思想研究会の会報誌をご覧下さり、誠にありがとうございます。この会報誌を維持・管理している仲條拓躬です。極東国際軍事裁判（所謂東京裁判）の際に山形県酒田市の商工会議所に設けられた臨時法廷に証人喚問された病床の石原莞爾を延々二十キロの距離をリヤカーで搬送した仲條立一の長男です。

長らく会報誌を維持・管理してまいりましたが、二〇一三年五月の総会で当会の会長に選任され、現在に至っております。石原莞爾は「満洲事変の首謀者」とされ、日中十五年戦争の嚆矢役となったとして「悪者」扱いられてきました。

しかし、第二次世界大戦終から今日まで続いている中東のイスラエルとパレスチナとの確執を見ても、単純にどちらかが一方的に「加害者」「悪」で他方が一方的な「被害者」「善」とは言えない現状があります。満洲事変もそのような混沌とした当時の国際環境下で行われた行為だと思います。

あの時代の満洲も今日の中東も、当事国だけでなく、利権を巡っての大国を始め多くの国が干渉関与してきたは言うまでもありません。「歴史は勝者によって造られる」のですが、やがてそんな「勝者」の一方的な歴史観に反発を覚えた「敗者」のルサンチマンによって、時の流れと共に歴史は見直されるようになります。

昨今の日中・日韓関係の悪化は、直接的な原因はそれぞれ異なりますが、根幹的には、「自国の歴史の再評価」の自我に目覚めた日本と、従来通りの歴史観を押し付けた中国と韓国との確執が根本にあると思います。そして、石原莞爾を再評価することは、戦争と終戦に至った昭和史前史を私たち自ら見直し再評価することでもあります。

今年は、石原莞爾生誕百三十年没後七十年です。石原莞爾生誕百周年に当る平成元年に参集し、その折に東亜連盟を継承した「協和党・協和会」が発展的解消して誕生したのが、石原莞爾平和思想研究会です。発足と同時に「永久平和」という会報誌を発行し続けております。当初は隔月刊（年六回発行）でしたが、現在は季刊（年四回）になっております。

爾来四半世紀以上になった当会ですが、

二〇一四年三月に三代目の編集長が亡くなり、現在は編集委員会監修の下、運営委員会で始まりメンバーを変更しながら編集業務を行っております。そして「会員のための会報誌」という編集方針に基づき、直接石原莞爾に関係のない記事でも内容次第では積極的に掲載するようにしています。

話しはがらりと変わりますが、「うどんすき」は昭和三年（一九二八）、大阪の「美々卯」で考案されたとされていて、現在は商標登録されています。ちなみに美々卯の社長は石原莞爾生誕百二十周年祭の実行委員長でした。新年会には江川達也先生などと一緒に京橋の美々卯で行いました。

★発行所 石原莞爾平和思想研究会

〒270-1158 千葉県我孫子市船戸1-3-15-113

石原莞爾平和思想研究会事務所内

FAX 04-7183-5591

郵便振替 00130-9-410942

発行人 仲條拓躬

編集人 「永久平和」編集委員会

定価 200円（送料別）

会費（年間） 篤志会員 10000円以上

一般会員5000円、誌友会員4000円

第149号 令和元年（2019年）7月25日発行